

会議報告書

アジア・大洋州における気候変動と脆弱性に関する国際会議

JAPAN CLIMATE CHALLENGE DAY 2022

～生き物たちの未来と、すぐそこにある気候変動～

2022年3月19日 於 ビー アット スタジオ ハラジユク

主催：外務省



I.概要

外務省は、2022年3月19日に東京都渋谷区のピー アット スタジオ ハラジユクにおいて、アジア・大洋州における気候変動と脆弱性に関する国際会議を開催した。気候変動外交におけるアクターとしての若者の重要性の高まりを踏まえ、Z世代（1990年代中盤から2010年代序盤までに生まれた世代）をメインターゲットとして、これまで気候変動問題に関心のなかった方々に、気候変動問題を身近に感じ、考えるきっかけをつくることを目的とする会議とした。

（会議事務局：株式会社小学館集英社プロダクション 運営：株式会社小学館）。

会議には、6名の専門家に加え、ターゲットであるZ世代から4名が参加し、気候変動が生物多様性に与える脅威や、それに対して国家がどのような対策を講じているのか、また、今後生じうるリスクに対する有効なアプローチや、若い世代が具体的にどんなアクションをとるべきかについて、活発な議論を行った。約1500名が視聴し、気候変動問題について考え始める動因につながる会議となった。

II.背景

気候変動はSDGsの諸目標の達成に横断的に関連している重要な課題であり、気候変動と脆弱性が国際安全保障に与える影響についても、国際社会の中では近年、G20やG7など様々な検討が進んでいる。

2022年2月には、気候変動の「影響・適応・脆弱性」を取り上げる気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第6次評価報告書第2作業部会報告書が公表され、現在の気候変動による影響が社会的にも大きく取り上げられている。

このような中、Z世代をメインターゲットとし、これまで気候変動に関心のなかった方々に気候変動を考える機会を提供し、日本の気候変動問題への取組の姿勢を示していくこととして、今次会議を開催した。

III.会議の目的と構成

今回の会議については、若い世代が気候変動問題に関心を深め、前向きなアクションつなげるにあたり、気候変動問題の影響を具体的に想起しやすいように、副題を「生き物たちの未来と、すぐそこにある気候変動」と掲げ、気候変動が生物多様性に与える脅威をテーマに設定した。

専門的な知識をもたない、若い世代の理解を深め、関心を高めるため、本会議には、広範な専門分野をもつ気候変動や生物多様性の研究者のみならず、生物の生態に日常的に触れている動物園や水族館といった施設従事者、高度な気象予測データに触れている気象予報士など、幅広い専門家が参加し、気候変動問題について理解を深めた。

またファシリテーターとして、ジャーナリストであり、日本放送協会にてアナウンサーであった堀潤氏が務め、会議の進行を行った。

会議はふたつのセッションから成り、会議にて掲示されたプレゼンテーション資料を添付する。

IV.各セッションの概要

1) オープニング

オープニングには、5名のZ世代が、それぞれ気候変動問題について、自らの考えを語る映像が流された。

その後、ゲストである女優／タレントの東ノエル氏から「環境について考えることはあまりないです。生まれてから当たり前のようにあったので、それに対して疑問を持つことは本当に少ない」という、16歳らしい、Z世代の実態が話された。またそれを受けて、ファシリテーターを務める堀潤氏より、「気候変動問題において、フロントラインで試行錯誤を続けきた方々をお招きして、まずは知って、自分たちがとるべきアクションを考える。そういう一日にしたい」という旨が話された。



2) わかりやすく解説！気候変動で生き物の未来は、わたしたちの暮らしはどうか？

堀氏より「今日は動物園・水族館、生き物と普段から向き合っている方々や気象関係の方々を招いた。今起きている気候変動のリアルについてそれぞれの立場からの解説を受け、Z世代代表の東ノエル氏や視聴者と共に、質問をしながら理解を深めていきたい」という宣言がなされ、各専門家の発表が行われた。

専門家による気候変動問題プレゼンテーション（1）

主に鳥類を担当し、2008年からライチョウの保全に取り組み、2021年に日本初となるライチョウの人工授精による孵化に成功。

高橋：上野動物園は300種、3000点の動物を飼育・繁殖に力を入れている。温暖化の影響で、動物たちの置かれている環境は厳しいものがある。現代の動物園においては、動物の福祉も重要であり、暑さを緩和する対処も大切になっている。

その中でも今回は、特にライチョウの生態について解説する。ライチョウは、北半球を中心に25亜種が生息しているが、日本のライチョウは、世界で最南端に生息する亜種だと言われている。元来、北半球の北部のみに生息していたが、氷河期の大陸が繋がっていた際に日本に渡ってきた名残で、日本でも高山の地域に生息している。

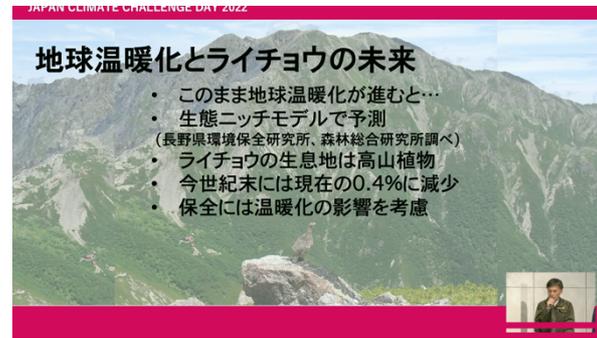
ただし現在、日本においては、1980年代に3000羽ほど生息していたものの、2000年代になって1700羽にまで減少している。特に、温暖化による植生の変化や、登山客による環境破壊で、生態系が乱れ、シカなどの動物がライチョウを襲う、餌を奪うなどして、個体減少につながっている。また、温室効果ガスによる影響もある。

減少しつつあるライチョウを守るためには、「①研究者がまもる」、「②国や自治体がまもる」、「③動物園がまもる」、「④個人がまもる」、という4つの保全活動を、車輪のように回していくことが必要であると考えます。上野動物園の保全活動として、自身がノルウェーにて飼育技術を習得し、別亜種を用いて日本のライチョウ飼育を開始している。

現在のペースで温暖化が進むと、ライチョウが住む高山帯の高山植物が、今世紀末までに、0.4%にまで減少し、それに伴ってライチョウも絶滅してしまうのではないかとされており、温暖化対策も急務だと考えられている。

以上の解説を受けて、ゲストの東ノエル氏は「よく山に遊びに行くので、ライチョウに会ってみたくなった」という感想を述べた。またこうした気候変動が与える影響について、初めて知ったということで、高橋氏より「動物園としては、ひとりひとりに何ができるかの答えは出さず、ライチョウをはじめ、動物たちの生態を観たうえで、何ができるかを考えるきっかけをつくりたい」という思いが述べられた。

また高橋氏より、東ノエル氏に対して、クラウドファンディングやボランティア活動などの紹介がなされ、さらに気軽に、動物の保全に関わることができるアクションに若い世代を巻き込める方法について、意見が求められた。東氏は、Z世代にとってのソーシャルネットワークサービス（以下、SNS）の存在の大きさを語った後、今回、解説されたような事実を、SNSを用いてしっかり伝えていくことが重要であるという指摘がなされた。



専門家による気候変動問題プレゼンテーション (2)

葛西臨海水族園 飼育展示課 教育普及係

田中隼人氏

葛西臨海水族園において、ガイドツアーや水槽前スポットガイドなどの解説業務や、学校団体向け教育プログラムの実施などの、教育普及活動に従事。気候変動について、海の生き物の生態から解説していく。

田中：葛西臨海水族園は、マグロの飼育で有名であり、マグロの群泳を世界で初めて成功させた水族館である。現在も約60匹のマグロが群泳しており、大きさも2m近くまで成長する。

またマグロ以外にはペンギンが有名であり、葛西臨海水族園の屋外展示場は日本最大規模で、4種類のペンギンを飼育している。ペンギンというと、寒冷地の生息している印象が強いが、フンボルトペンギンは日本と同じ温帯に生息していて、南米地域に多く暮らしている。日本国内では1900羽が飼育されているが、野生のフンボルトペンギンとなると、世界でも約2万4000羽しかおらず、絶滅危惧種に指定されている。

これは、人間の開発などによって、生息・繁殖する場所がなくなってしまったことも要因のひとつだが、同時に気候変動も要因とされている。フンボルトペンギンの主たる餌はカタクチイワシ科の小さい海水魚・アンチョビであるが、温暖化の影響で、生息する沿岸のペルー海流が変化し、結果、餌の不足から繁殖できなくなっており、これが個体数減少につながっている。

気候変動によって地球が温暖化すると、海の水温が上がり、酸素が減ってしまう。海洋生物は、水の中に溶けた酸素を取り込んで生きているが、このまま温暖化が進むと、それがなくなってしまうと言われている。地球の歴史を見てみると、「海洋無酸素事変」という事態が何度か起こっており、最新のものと、2億6000万年前や1億5000万年前にあったとされている。当時、多くの海洋生物は絶滅してしまった。

これに類似したことが東京の海でも起こっており、無酸素状態の水、あるいは硫化水素を含んだ水によって、青潮の現象が確認されている。実際には気候変動が原因で引き起こされたことではないが、気候変動によって近い将来に起こるかもしれないと言われている。

この青潮の影響で、葛西臨海水族園前の西なぎさでは、海洋生物の死骸が数多く確認された。今大きいものとしてアカエイがあるが、貝や小さな魚も数多く死んでいる。

以上の解説を受けて、ゲストの東ノエル氏は「海のある地域に住んでおり、身近な存在ではあるが、実際に海でどういうことが起こっているかは知らなかった。海水浴などでゴミを置いてくるなど、無知によって引き起こされる、よくない行動があると感じる」という感想を述べた。また東氏が海洋生物の中ではクラゲに愛着を感じるということを受けて、田中氏より「深い海に住んでいるクラゲもいるが、そうした深海も気候変動の影響を受け始めているといわれており、その影響で個体数が減ってしまう可能性がある」という解説がなされた。

また田中氏より、東ノエル氏に対して、子供や大人の世代には、海洋生物に関する情報が届きやすいが、Z世代に届きにくいと感じているという憂慮が伝えられた。東氏からは、Z世代にとって、手の届きやすい場所に、こうした海洋生物の生態を知ることができる情報が少ないのではないかという指摘があった。また、直感的にわかりやすいコンテンツなどが有効なのではないかという提案がなされた。



専門家による気候変動問題プレゼンテーション (3)

気象予報士

岡田沙也加氏

気象予報士として、テレビ番組などで気象情報を伝えている。また防災や温暖化防止の活動に力を入れており、全国各地で講演会活動を行う。災害ボランティアの経験から、法律で人を助ける行政書士の資格ももつ。

岡田：今回は、気象予報士という立場から「2100年の天気」というテーマで、今から100年後の未来を創造し、それが生き物や、日本で暮らす我々人間にとって、どんな影響があるかを考えてみる。

今から250年前、産業革命の時代と比べ、地球の気温は1℃上昇している。注目したいのは、「わずか1℃である」ということ。しかしこの先の100年後では、最も楽観的な見方でも、1.5℃までの上昇は免れない。何も対策をしないと、最大4℃まで上がるとい

われており、この影響で大雨は 1.7 倍に、猛暑の日は 14 倍になる。また、世界の気象災害はこの 50 年間で 5 倍になった。

このままのペースだと仮定すると、東京の気候は鹿児島と同じになる。これは計算上、100 年で南に 460km 気候が変化していると言われている。そうすると、変化した気候に馴染めない生き物が生まれ、絶滅のリスクにさらされることに。

生き物の移動というのは、チーターなどの動物であれば、それほど時間がかからずに移動できるが、もみの木であれば、例えば 4600m 移動するのに、種子を運ぶ野生動物虫たちの力を借りながら種が移動することを考えると、100 年以上はかかる。それに伴う生態系にも大きな影響が出てくるので、膨大な数の生き物への影響は免れない。

また身近な生活というところの影響も見ていくことにする。100 年後、東京の最高気温は何度になるかということ、現在までの最高気温が 39.5℃なのに対して、43.5℃になるといわれている。熱中症などの健康被害が増加するほか、23 区内でも、江東区、墨田区、江戸川区、葛飾区のほぼ全域に影響があると予測されている。

また、生活や文化、習慣などにも影響は及び、たとえば秋の紅葉はクリスマスに見ごろになる、桜が開花しなくなる地域が出てくる、降雪する場所は減少するが、一方で災害級の大雪は増える、などといった予測が出ている。

以上の解説を受けて、東ノエル氏は「これまでもさまざまな異常気象についての情報を聞いていたが、結局は全部つながっていることを感じて、より危機感を抱いた」という感想を述べた。岡田氏からは、「気象の変化は、現代の Z 世代が、これから年齢を重ねていったときに、身近に感じる問題であるため、こうした現実をもっと知ってもらい、どうやって対策していけばいいかという議論を盛り上げてもらいたい」という希望が述べられた。

また、それを受けて東氏は、「今の Z 世代の武器である SNS を有効に使っていきたい。今現時点でも SNS で訴えている投稿を見かけるようになってきたので、自分もそういった情報をシェアして、自分たちの世代として、当事者意識を持てるようなアクションをしたい」という決意を述べた。また堀氏からも、「自身もメディアで発信する立場であるため、Z 世代の個人の発信力だけに依存するのではなく、大きなメディアも歩調を合わせて変化していかなければいけないと感じる」という感想が述べられた。



JAPAN CLIMATE CHALLENGE DAY 2022

日本の気候の変化は？

このまま何も対策をしなければ2100年には、東京の気温は**鹿児島**と同じに！

これは、100年間で南に**約460km**、気候がずれるという計算
→1年間では、4600mの変化



第1部のまとめ

ここまでの3名の専門家の解説を聞いて、東氏は「自然が好きで、綺麗だな、素敵だなという感想で終わらせていたが、そこで暮らしている生物や、そこで起きている現状を知り、自然が好きという思いだけで終わらせられない、時間を無駄にせず、今日を機会に、もっと気候変動問題について、深掘していきたい」という感想が述べられた。

また、視聴者から「四季が消えてしまうのは悲しい」「世界の気候変動について、あまり大きく報道されない印象がある」といったコメントがあり、それについて、所感を語り合った。

各専門家からは、「これまで自分たちの発信がどのように伝わっているのか、把握するのが難しいところもあったので、今回のYOUTUBEでの配信によって、ダイレクトに反響をもらえたのが良かった」（田中氏）、「Z世代の反応を見て、こういうことに興味があり、逆にこういうことは一般的にあまり知られていないというのを直接聞いたので、今後の発信に活かしたい」（岡田氏）、「ライチョウのことを知るだけでも、大いに勉強になったという感想が聞けたので、今後の情報発信に参考にしたい」（高橋氏）という感想が述べられた。

また東氏からも「自分のように、日常的にニュースを見ないZ世代も多いと思うが、YouTube配信であれば、常に触れているスマートフォンからすぐ見られるので、よい機会になったと思う。気候変動問題は、自分には関係ないと、どこかで切り離している部分もあったので、改善していきたい」という決意が述べられた。

3) 専門家と徹底討論！いま、ここから始める気候変動アクション

直面している気候変動に対して、どのように立ち向かい、具体的にどのようなアクションをとるべきかを、気候変動や生態系の専門家3名と、Z世代の代表者3名によって、ディスカッションを行った。

【ファシリテーター】

堀潤氏（ジャーナリスト・元NHKアナウンサー）

【パネリスト】

西廣淳氏（国立環境研究所気候変動適応センター 室長）

あん・まくどなるど氏（上智大学大学院 地球環境学研究所 教授）

大高準一郎氏（外務省 国際協力局 気候変動課 課長）

阿部将貴氏（東京大学大学院 新領域創成科学研究科 国際協力専攻修士課程所属）

清水虹希氏（慶應義塾大学 総合政策学部所属）

藁谷詩歩氏（N高等学校所属）



イシュー（１）「気候変動が問題になっている今、人間は自然を、動物をどう守るべきか」

西廣：気候変動が進むことが、野生の生物の絶滅リスクを高めているのは間違いない。本来、生物は環境変化に合わせて進化するが、長い時間がかかり、かつ進化が早い生物と遅い生物がいるため、やはり急速に環境が変化すると追いつかなくて絶滅すると考えることは正しい。その考え方からすると、温室効果ガスの排出などを減らして、気候変動の進行を遅らせることは、生物を守るために大事なことだと言える。

ただし、それだけがすべてではない。気候変動というのは、気温が上がるだけではなく、その変動幅が大きくなる。そんな中、気温が上がったとしても、生物たちに回避する場所があれば、死なないで済むとか、だんだん気温が上がっても、標高が高いところに移動できれば生き延びることができると思うこともできる。

具体的には、広い範囲に繋がっている森林や、曲がっていたり深淺差があったりすることで水温差をもつ河川といった、変化対応できる生態系のあり方と、その多様な環境を整えていくこと、つまり、人類の開発によって、単調にしてしまった自然を、もう一度回復させることで、気候変動に対して強い生態系にしていくという意味で重要である。

人口が増加する時代や、経済成長がないと飢餓が発生するリスクのある時代と、人口が減少し、一方で気候の変化は大きくなる時代とでは、自然との付き合い方を切り替えなければいけない。そういった視点で考えると、「生き物や自然をどうやって守るか」という設問自体、違和感がある。



余裕がある人類が弱い存在を守るかと捉えられがちだが、それとは違う見方も重要であり、現在も人類の暮らしそのものが、自然に支えられている。例えば、リンゴや桃、スイカ、かぼちゃ、そばなどは、虫がいないと実らない作物。花粉を運ぶ虫がいて、初めて食料を得ることができる。あるいは、森の状態によっては災害の影響を軽減できる。人類が

自然に守ってもらっていることを考えれば、一方的に自然を守るというよりも、その地域の自然を大切に、動植物と共生していくことが重要だと考える。

藁谷：自然の力を利用するというのにはまさに共感するところがある。通っていた中学校でも、ミミズを活用したコンポストや、ゴーヤのグリーンカーテンといった、自然の力を活用して、生活環境をよくしていく活動をしていて、SDGsの授業にも取り入れられていた。個人ではなく、学校という大きな単位でこうしたことが学べたのは非常に有意義だった。このように個人ではなく、学校などの単位ででき出来る取り組みがあると良いのではないか。

大高：西廣氏の指摘どおり、そもそも気候変動の原因になっている温暖化は抑止しなければいけないので、日本政府としても大きな方針を出していて、2050年までに実質排出をゼロにすると言っている。それに向けて、産業面やエネルギー面など、さまざまな政策を組み合わせて実行している。

それと同時に、自然や生き物と共生していく循環型社会を、自治体や国、さらには世界に広めていくことも重要。世界の陸地と海のそれぞれの30%を、2030年までに保護する「30・30・30」という目標があるが、日本もこれに加わっている。

あん：日本として、こうした活動にイニシアチブをとることはとても重要。だが同時に直面している問題として、特定の国や地域だけでは語れないジレンマがある。現在、ミクロネシアやマーシャル諸島やパラオといった島国で、環境保全の政策策定を行っているが、経済活動や消費活動とも深く複雑に関係するので、バランスをとるのが非常に難しいと実感している。

西廣：経済と繋げていくことは、とても重要だと考える。動植物をどう守るかというのは、二酸化炭素の排出などと比べて、どうしても後追いというか、経済との結びつきが弱く、なかなか前進しなかった。しかし近年、動きが活発化してきている。具体的には、ESG投資というような考え方が、動植物の領域まで及んできた変化がある。ただし、現在も進んでいる身近な自然の喪失については、経済だけに任せていては、守りきれない。

清水：国として個人としても、自分たちの行動が生き物や自然環境に影響を及ぼしていることをもっと体験することができれば、小さいながらもアクションにつながり、ダイナミズムが生まれるのではないかと思う。

大高：実際にアクションを起こせば、それがコアとなって広がっていく。さらに国際的な目で見ると、そういった取り組みが海外の国とも繋がることのできたなら興味深い。去年のCOP26にも多くの若い世代が参加し、気候変動問題の重要性をさまざまな視点から打ち出していた。国としての方針も大事だが、具体的なアクションについての、個別の会話に説得力が出ると感じる。

あん：海外との繋がりという点では、例えば、私が関わっているマーシャル諸島の人々は、十数年間、気候変動とともに生きている。彼らはもうすでに、気候変動と食料供給安定問題や、食料自給率の問題に日々衝突している。そういった分野において、日本の可能性には期待している。日本の漁業には、技術と資源管理の仕組みがあり、また農業分野でも、小規模でローコスト、ローテク、ローインパクトで、北海道から沖縄まで、さまざまな気候に適応するために、工夫されている。そういった技術は、適応において重要になってくるのではないか。

西廣：ローカルな技術から学んでいくことは、これからますます重要になる。自然を生かしながら守る活動に、もっと若い世代が参加してもらえれば、新しい文化が生まれるのではないかと期待している。

イシュー（2）気候変動で私たちの食卓はどう変わる？今からできることは？

あん：私は1999年から19年間にわたって、環境省で気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の政府レビュー業務に関わり、IPCCの会議などにも出席した。そこで科学者たちが「温暖化は既に農林水産業の現場で起きている」と言っていて、実際に現場で何が起きているのかを自分で見たいと



思い、2001年に環境省と地球人間環境フォーラムと一緒にプロジェクトを組み、3年間に渡って、北海道から沖縄まで、農業、漁業、林業の現場を見た。今から20年近く前のことだが、もうすでにさまざまな変化が起きていた。

例えば、当時は九州と沖縄といった日本の南部で温暖化の影響が出ており、特に、九州の稲作が強い影響を受けて、それまで確実に収穫できていた一等米が取れなくなる、といったことが起こっていた。しかし、日本には、各都道府県に農作物の試験所があり、地元のためにその地域の気候に目と耳を傾けながら、生産現場が抱えている課題をともに解決していく。九州で言うと、熊本の試験場で気候変動に適応できる品種改良に挑戦しようということで、「にこまる」という品種を作った。

またコメ以外にも、果実への影響も大きい。温暖化を迎える中で、今まではリンゴを作っていたのが、もしかすると孫の世代にはリンゴではなく、ミカンに切り替えていかなければいけないといったようなことが起こる。経済的に成立するためには、果実の場合は、木を植えて果実が実るまでには長い時間がかかるうえ上、相当なコストも必要なので、環境保護税といった、税制の仕組みを検討する必要もあると考えている。

阿部：私も実践的に食糧問題などを学ぶために、農業を学ぼうと長野県の農家の方のところに行ったが、その方が言うには、「今の農家というのは、昔からの長年の経験則は通用

しない。毎年のように変わる気候、猛暑や温暖化によって、10年前の知識を使えない」と話していた。そういう厳しい状況においては、補助金や税制度についても議論を進めていくべきであるし、消費者の側としても、生産する者が直接見える買い方をすることで、経済的に成立するようになるのではないか。

西廣：温暖化に強い品種に変えていくっていうのも大事だが、変化が大きくなっている中で、同じ品種で広い範囲で育てるという既存の農業のあり方の弱点が露呈しているとも考えられるのではないか。小規模でさまざまな作物をつくっているほうが、変化に対して強い。その重要性が、また見えてきたと感じる。

あん：消費者として意識しやすいのは、食生活で季節感を取り戻すこと。生物多様性を育み、さらに温室効果ガスを減らしていける農法にも繋がる。一石二鳥ではないが、生物多様性保全と気候変動を、共に考えていく必要があるのではないか。

藁谷：確かに、今の時代はとても便利で、一年中同じものが食べられる。例えば、イチゴのショートケーキは、年間を通して販売されている。日本は四季のイベントを大切にしている性質があるので、食べるものに対しても、その意識を強めていけば、農業や漁業のことまで想像を働かせることができるのではないか。

大高：食糧問題というのは、全員に関係すること。政府としてもグリーン成長戦略や、緑の食料システム戦略というものを掲げている。食品ロス、生物多様性といった問題ともすべて繋がっている。生き物と共生を図ることが、食料についても、環境と両立した営みにしていくかが問われていると思う。これは日本としても、国際社会とも協力して行っていくべきで、農業分野でも、例えばアメリカなどとは、技術交流などが進んでいる。

あん：顔の見える農業という点では、日本でもずいぶん進んできたが、他の国から学ぶことも多い。例えば、フランスのスーパーマーケットでは、水産物売り場に地図が掲示されていて、地域性や季節性が学べる。またあわせて、乱獲による水産資源への影響なども書かれている。消費者としても、すぐその場で情報が入るので、理解しやすい。

清水：日本のスーパーマーケットにも、類似した取り組みをやっているところがあるので、その動きが広まってほしい。またコンビニエンスストアでも、近隣の農家でつくった農作物が買えるなどのサービスが生まれている。それによって、正しい消費が身近になり、食料問題、そして気候変動問題との距離も近くなるのではないかと感じた。

イシュー（3）気候変動に対して日本と地域は、そして世界は何ができるのか。

大高：国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、昨年8月に、人間が地球の気候を温暖化させてきたことに、疑う余地がないとする報告を公表した。また、COP26の直前に国連が発表した、会議場に恐竜が突然入ってきて、環境変化と絶滅に対するシビアな問いかけをするという動画もインパクトがあったと思う。



世界的には、国際社会で気候変動をしっかり扱っていかうという動きはかなり高まっていると言える。また、岸田総理も現地でスピーチをしたが、2030年までの期間が勝負の10年だということで、そこまでに大幅に、2010年時点の半分近くまで温暖化ガスを減らしていかないと、今のパリ協定の目標を達成するのは、難しいといったことが示されている。

ただし、それを実際にどうやっていくのか、例えば支援が必要なところはどのようにしていくのか。あるいは、既に起こっている影響にどう対処していくのかは、これからの課題になっている。

また、新たに開発されるテクノロジー、あるいはライフスタイルの変化への問題意識、また気候変動に対処する企業にお金が集まるという、これまでにはなかった動きも出てきている。そういったひとつひとつの動きをどうやってつなぎ合わせて、全体に目標の達成に生かしていけるか、ここが今まさに問われている。

阿部：攻撃的な言い方になるが、環境保護や気候変動に取り組んでない企業は、経済活動ができなくなる、というくらいの状況にならなければいけないと思う。そのために、消費者としては、気候変動や環境問題対策に積極的に取り組んでいる企業の製品・サービスしか購入しないという選択をとること。そしてもうひとつ、今後、我々の世代が社会に出るときに、気候変動に取り組んでない会社には行かないという、「エシカル就活」という取り組みがある。こうした動きを加速させる必要があるのではないか。

清水：私たちの消費の軸を、そういった意識に変えていくのは非常に重要だと思うが、それだけだと広がりには欠けると感じる。やはり、環境にいいということだけではなく、デザインがいいからとか、商品に愛着を感じるからという動機も、同時に大切にすべき。その裏側に、環境への配慮や社会システムへの好循環が整っていることが重要だと思う。そこも含めて、消費者が選び、企業もその価値観にアジャストして、大きな流れになるのではないか。

あん：アプローチ方法は、さまざまあると思うが、やはり若い世代の声を政策作りに入れていかないといけないと強く感じる。今、ある島国で、気候政策をゼロからつくる取り組

みをしているが、そこには専門家や行政だけでなく、民間企業や NGO、NPO、それにコースグループが必ず入ってくる。日本にも、もっと若い人のパワーや夢があれば、違う角度からのソリューションが生まれてくるかもしれない。

大高：まさにそれは今回の会議の趣旨ではあるが、同時に思うのは、「若い世代の声を政策に生かしていく」という考えは、その声の持ち主が政策とは別の位置づけになり、政策をつくる人、提案する人と分断されているように感じる原因のひとつなのではないか。それよりも、一緒に政策をつくる、提案していくという感覚をもつことが重要だと考える。

藁谷：自身の体験として、Z世代の声を届けるというミッションで企業のミーティングに参加したことがあるが、その際、年齢や世代があらかじめ明らかになっていると、フラットな関係を築くことが困難で、意見を表明しづらい雰囲気になりがちである。肩書きがない、裸の状態で話し合うことで、新しいクリエイティブなものが生み出せられるのではないかという希望もある。また、我々Z世代だけに期待されるのではなく、どの世代も平等に意見を言うことができ、アクションを起こせる状態を作り出すべきだと思う。

西廣：まさにその通りで、年配の世代は経験で物事を判断しがちであるが、30年や50年の経験は、この変化の時代にそれほど大事とは思えない。もっと広い視野で勉強することのほうが、気候変動問題を考えるうえでは、ずっと重要だと考える。

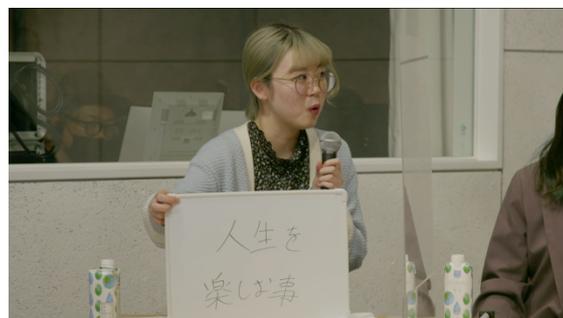
大高：今回、こうした語らいの中から、さまざまな考え方やアイデアが出てくることを実感した。日本というのは、世界の中の温室効果ガスの占める割合は3%くらいであり、他の国に働きかけていく必要があるが、こうした議論の中からアクションが生まれ、それを事例として世界に広げていければ、より説得力を持った議論を進めていけるのではないかと思う。

(4) 明日から何をする？何を変える？

最後にまとめとして、参加したZ世代を代表する3名が、どのようなアクションを明日から起こしていくか、この会議を通して感じた気づきを挙げてもらった。

藁谷詩歩氏：「自分の人生を楽しむこと」

気候変動問題は難しいものだと思っている人が多く、また、人類のために、地球のためにと考えると、プレッシャーになってしまう可能性もある。しかし、人生100年時代と言われている中で、実際に自分に返ってくることも考えられる。だからこそ、こうした変化の中で、自分の人生を楽しむことを意識すると、環境問題に対しても自分ごと化できるのではないか。だからこそ、一日一日を後悔せず、まずは自分の人生を思う存分楽しむことが、今すぐに見えることだと感じた。



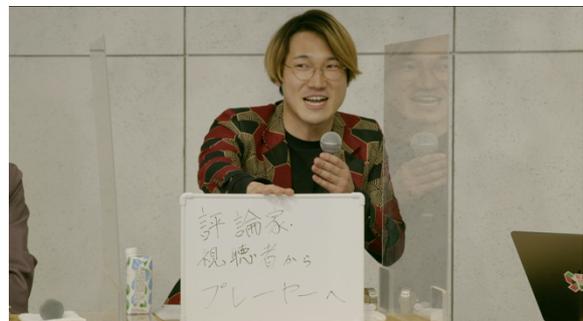
清水虹希氏「日々の暮らしから知る。それを行動に移す」

清水：今日の会議で、身近なところにさまざまな興味のタネが広がっていることを知った。まずは、そういった知らないことを知って、興味あることについて行動に移してみることをやってみたい。興味が湧くというのは、それが好きだという純粋な思いだと思う。だから、自分の好きだという気持ちに忠実に生きたいと感じた。



阿部将貴氏「評論家、視聴者からプレーヤーになること」

阿部氏：こういった議論では、問題について考える人と実際に行動する人の間に立つ、橋渡しになる人がいればいいとしばしば言われるが、現実としてそういった人間は存在しないので、問題について考えている人が、プレーヤーになって、両方できるようになるのが重要だと感じた。そうして、論じるだけでなく、実際に行動してみれば、議論がもっと深まり、アイデアも生まれてくるのではないかな。



3名の発表を受けて、大高氏からは、「好きなことや興味があることを追求していくという思いはとても重要で、気候変動問題というのは、ともすれば我慢をしたり、義務感にかられて対応するような問題にとらえられたりしがちではあるが、それでは長続きしない。だからこそ、前向きに取り組めるスタンスをもつことは非常に重要な観点である」という感想が述べられた。西廣氏からは、「まさにこれから、長い時間をかけて取り組むのは若い世代であるため、自分たちにできることとしては、あまり届いていない情報を掘り起こすなどの手伝いをしていきたい」という感想が述べられた。また、あん氏からは、「自分自身も、さまざまな考え方に触れて、今まで無関心であったこととか、無知だったことを知り、新しい発見を求めることをしていきたい」という感想が述べられた。

視聴者からも、「我慢しないでやりたいことを追求した先が環境に優しくなったら嬉しい」「我慢しない気候変動」「それをSNSなど発信したらいいのかもしれない」「まず自然に対峙する前に、自然に謝りたい」といった多くのコメントが届いた。

(4) まとめ

最後に、本会議を主催した外務省を代表して、大高準一郎氏より、閉会の辞が述べられた。

大高：今日は、若い世代のもつパワーに圧倒され、素晴らしいと思い、ある意味では、日本と世界の未来は安泰だなと言いたい。しかし、これほど気候変動がすごく危機的な状況だと言われている中で、みんなが知恵を絞っていく必要があると思う。こうした情熱ややる気が今後に生かされることを期待している。また、視聴してくれた方々の中には、自分ばかりでここまで熱量をもてないと感じた人もいるかと思うが、それでもいいと感じている。皆がそれぞれのやり方で、気候変動問題を考えていけたらいい。今日の会議が、日本の気候変動の取り組み、そして世界全体の取り組みにつながる機会となったことを期待する。

以上